

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.59-74)

<論文>

故郷を離れマナグア湖のほとりで
— チョロテガとニカラオの移住をめぐる諸問題 —

長谷川悦夫 (埼玉大学教育機構非常勤講師)

On the Shore of Lake Managua, Far from the Homeland – Some issues about
migration of the Chorotega and the Nicaraao

Etsuo Hasegawa
(Education and Student Services Bureau, Saitama University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua
Japan Society for Studies of Ancient America

<調査研究速報>

故郷を離れマナグア湖のほとりで —チョロテガとニカラオの移住をめぐる諸問題—

長谷川悦夫
(埼玉大学教育機構非常勤講師)

1. はじめに

ニカラグアは中央アメリカ地峡に位置する。同国の太平洋岸は、北西から南東に連なる火山と湖に特徴づけられる。最大のニカラグア湖は8029平方キロであり、南アメリカ大陸のペルーとボリビアにまたがるチチカカ湖(8372平方キロ)よりもやや小さい。次に大きいマナグア(Managua)湖は1049平方キロで琵琶湖の1.5倍ほどの大きさである^(註1)。マナグア湖の南岸には人口約200万人の首都マナグア市が広がる。いずれも淡水湖である。

ニカラグア太平洋岸はコスタリカ北西部とともにメソアメリカの南東の辺境とされる。先スペイン期「メソアメリカ」では、トウモロコシ農耕、黒曜石の石器、260日暦と365日暦、文字、階段状ピラミッド建築、球技と球技場、などの文化要素が共有されていた。それとともに、メソアメリカは中央アンデスと並ぶ先スペイン期アメリカ大陸の二大文明地帯のひとつであり、この地にアステカ(Aztec)、マヤ(Maya)、サポテカ(Zapotec)など先住民文明が興亡した。

ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部では、メソアメリカ先古典期前期から中期に相当するオロシ(Orosi)期(2000-400BC)からすでに土器が出土しており、古くからの人間居住が確認されている[Hoopes 1994; Haberland 1992; Espinoza 1995]。しかし、この地がメソアメリカの一部となったのは比較的遅く、メソアメリカの後古典期に当たる時代であり、そのメソアメリカ化の要因は、ニカラオ(Nicarao)とチョロテガ(Chorotega)という二つの民族集団のメキシコから移住であるとされてきた[Chapman 1960 など]。

現在ニカラグア考古学の大きな問題は、この移住をめぐるものである。後で詳述するように、まず移住が起こった年代に関する疑問があり、またこれらのメソアメリカ系の民族集団が当然もたらすであろうと予想される文化要素が、ニカラグアの遺跡では欠落するかまたは希薄であるという問題がある[McCafferty and Steinbrenner 2005; McCafferty 2010, 2011, 2015]。これらの問題は、2000年代にニカラグア湖周辺の3つの遺跡で行われた発掘調査から提起されており、著者はこれを検証する目的で、もう一つの大きな湖、マナグア湖の湖岸で2つの遺跡を発掘した[Hasegawa 2017; Hasegawa et al. 2019; 長谷川 2016]。いずれの遺跡でも学術的な発掘が行われたのは今回が初めてであり、本稿ではこの調査結果を紹介し、当該地域の文化史におけるチョロテガとニカラオの民族移動について論じる。

2. マナグア湖畔の遺跡の発掘調査

2-1. チラマティーヨ (Chilamatillo)

チラマティーヨ遺跡は首都マナグアから北へ約 31 キロ、湖の東岸、ティピタパ (Tipitapa) 市に所在する (図 1、以下遺跡の位置については同図を参照)。湖岸から、7 メートルほどの高さの台地上にかけて、土器や石器が地表面に散乱する。以前から、埋葬用とみられる大型甕形土器が発見され、地元住民にも知られていた。

2014 年、この台地上に 2 メートル四方の試掘坑を 1 カ所発掘した。ここでは緩やかな地表の盛り上がりが見られ、土中に埋もれた建築が見つかることも期待されたが、発掘では建築構造は確認

されず、この盛り上がりは自然地形と考えられる。発掘は 10 センチごとの人工層位で行った。発掘作業中は層序が明確に見極められなかったためであり、攪乱されている可能性も否定はできないが、完掘後に土層断面を観察したところでは、不明瞭ながらもほぼ水平な堆積層の重なりが見られ、はっきりとした攪乱の痕は認められなかった。遺物包含層は地表下 1 メートルまで続き、計 3741 点の土器片、石器、魚類の骨、亀の甲羅などが出土した。

発掘で得られた土器のうち 1598 点が既知の土器型式に分類された。先古典期後期に当たり、当該地域の現行の編年でいうテンピスケ (Tempisque) 期 (400BC-AD300) や、古典期と並行するバガセス (Bagaces) 期 (AD300-800) の土器も出土しているが、ごくわずかである。出土土器の大部分を占めたのは、古典期終末期から後古典期前期とされるサポア (Sapoa) 期 (AD800-1350) の土器が 519 点 (土器型式が同定された破片数の 32.5%)、概ね後古典期後期に相当するとされるオメテペ (Ometepe) 期 (AD1350-1550) の土器が 1032 点 (同 64.6%) で



図1 ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部の遺跡



図2 チラマティーヨ出土、サポア・オメテペ期の多彩色土器



図3 同、土製錘

試料名	測定機関番号	^{14}C 年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	較正年代 (cal BC/AD)		出土状況
				(1 σ ; 確率68.2%)	(2 σ ; 確率95.4%)	
Sample 1	IAAA-160623	800 $\pm$ 20	-22.85 $\pm$ 0.39	AD1220-1260 (68.2%)	AD1210-1275 (95.4%)	チラマティーヨ遺跡試掘坑、6層出土炭化物
Sample 2	IAAA-160624	780 $\pm$ 20	-25.13 $\pm$ 0.52	AD1225-1235 (14.4%), AD1240-1270 (53.8%)	AD1220-1280 (95.4%)	チラマティーヨ遺跡試掘坑、8層出土炭化物

表1 チラマティーヨ遺跡のC14年代測定結果(加速器分析研究所白川分析センター)

あった(図2)。ところが、これら時期差があるべき最後の二つの時期の土器は、下層から上層まで全ての層で混在しており、層位的な前後関係が認められない。後述するが、サボア期とオメテペ期は、実際には大部分並行しているのではないかという疑いがある。第6層と第8層から得られたC14年代は、それぞれAD1210-1275、AD1220-1280で、現行編年ではサボア期の年代である(表1)。また、特徴的な遺物として両側に挟りが入った土器片が数多く発見された(図3)。漁労の際に用いられた網または釣り糸に付ける錘と考えられる。

試掘では多くの石器も出土し、表採品と併せれば273点で、石材も多様である(図4)。玄武岩が大多数で、



図4 チラマティーヨ出土、打製石器

赤色チャート、玉髄、11点の黒曜石も含まれる。打製石器が圧倒的に多く、打製石斧、石錐、尖頭器なども散見されるが、ほとんどは不定形の剥片である。

以上から、チラマティーヨではサボア期以降に活発な人間活動があったといえる。土器などの遺物の密度の高さから、居住地であることは明らかであり、上記のように埋葬と思われる大型土器も偶発的に発見される。出土する魚骨、亀の甲羅や、錘と思われる土器片からは、漁労に大きく依存する生活様式がうかがえる。この遺跡付近の沿岸、沖合には良好な漁場があり、周辺には、湖で漁をする人々が寝

泊まりする仮小屋が現在でも存在する。様々な石材の不定形の剥片からは、湖の水上交通を通じた石器原材料の交易や石器製作が行われていた可能性も推測できる。

2-2. ラ・パス (La Paz)

もう一方のラ・パス遺跡は、マナグアから北西へ街道沿いに約17キロ、マテアレ (Mateare) 市に所在する。チルテペ (Chiltepe) 半島の付け根、マナグア湖岸の平坦地に所在し、土地は西から東へと、湖に向かってごく緩やかに傾斜している。遺跡から西に行くと丘陵や台地が連なっているが、標高は高いところでも湖水面から120メートルほどである。特筆すべきは、この遺跡には直径約20メートル、高さ2.8メートルのマウンドがあり、「マウンド1」と命名された(図5)。ニカラグア太平洋岸では例外的な遺跡といえる。ニカラグア内陸部には数多くのマウンド遺跡が残存しているが、太平洋岸では農業や土地開発で破壊された遺跡が多いためか、地表面からある程度の高さを保つ先スペイン期の



図5 ラ・パス遺跡、マウンド1

建築遺構は極めて稀である。ラ・パスに比肩するマウンドが存在する遺跡として太平洋岸で現在知られているのは、マナグア市のロス・プラセーレス (Los Placeres) [Stauber 1996]、レオン市のエル・アパンテ (El Apante) [Bris et al. 1999] の二遺跡だけである。

ラ・パス遺跡はごく最近になってその存在が知られるようになった。湖岸に沿って、広範囲にわたり土器、石



図6 ラ・パス遺跡、マウンド1内部の方形石造基壇

器などの遺物が地表面に観察される。遺跡は複数の私有地にまたがり、これまで調査を実施してきた区画 (約0.8ヘクタール) 以外には立ち入り許可が得られておらず、いまだ遺跡の全体像はつかめていない。

ラ・パスでの発掘調査は、マウンド1の建築シーケンスの解明に重点を置いた。マウンド西側で建築構造の調査を試みた結果、内部に方形基壇が埋まっていることが確認された。高さは50センチ程度まで残存している。石材は未加工で粗いながらも、明確な面を持つ壁が観察される (図6)。

方形基壇に対応する周辺の床面である「床面1」の直上からは、植物圧痕がある焼土が出土した。よって、上部構造は、木の枝や植物の茎などを芯にして粘土を塗った木舞壁を擁しており、それが何らかの原因で焼け落ちたと考えられる。マウンドの発掘では土器、動物遺存体、炭、灰など生活廃棄物の出土は少なく、消極的な推論であるが、祭祀用建造物であると考えられる。基壇に対応する床面1出土の炭化物のC14年代は、AD1220-1280、基壇を覆って円形マウンドに造り替えた際の粘土の盛り土からの試料では、AD1280-1310、AD1360-1390という年代が得られている (以下、ラ・パス遺跡のC14年代については表2を参照)。

マウンド西側で発掘を進めたところ、方形石造基壇が築かれた床面1の30センチ下に、さらに古い床面であ

試料名	測定機関番号	^{14}C 年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	較正年代 (cal BC/AD)		出土状況
				(1 σ : 確率68.2%)	(2 σ : 確率95.4%)	
La Paz 124	TKA-17309	2104 $\pm$ 19	-26.9 $\pm$ 0.3	170-95 BC (68.2%)	185-50BC (95.4%)	マウンド頂上部の試掘で得られた炭化物
La Paz 2018-4	TKA-19680	1412 $\pm$ 25	-22.9 $\pm$ 0.3	AD620-655 (68.2%)	AD600-665(95.4%)	マウンド1西側の遺物包含層最下層の炭化物
La Paz 2018-3	TKA-19446	1039 $\pm$ 43	-9.9 $\pm$ 0.5	AD905-920 (4.6%), AD965-1030 (63.6%),	AD890-1045 (91.3%), AD1095-1120 (3.6%), AD1140-1150 (0.6%),	埋葬地区の墓棺6から出土した人骨
La Paz 2018-1	TKA-19679	869 $\pm$ 25	-25.6 $\pm$ 0.3	AD1160-1215 (68.2%)	AD1045-1090 (12.6%), AD1120-1140 (2.8%), AD1145-1225 (79.6%), AD1235-1245(0.5%)	埋葬地区の墓棺3から出土した炭化物
La Paz 2018-2	TKA-19445	857 $\pm$ 41	-16.2 $\pm$ 0.6	AD1055-1065 (1.8%), AD1150-1250 (66.4%)	AD1045-1100 (15.5%), AD1120-1265 (79.9%)	埋葬地区の墓棺2から出土した人骨
La Paz 2017-23	TKA-18613	893 $\pm$ 18	-25.5 $\pm$ 0.2	AD1050-1085 (32.9%), AD1150-1185 (35.3%)	AD1045-1095 (38.8%), AD1120-1145 (9.9%), AD1145-1215 (46.7%)	方形基壇の下層、柱穴の床面の下の盛り土の中の炭化物
La Paz 94	TKA-17308	761 $\pm$ 18	-27.2 $\pm$ 0.3	AD1255-1280 (68.2%)	AD1220-1280 (95.4%)	方形石造基壇に対応する床面から得られた炭化物
La Paz 2017-4	TKA-18614	734 $\pm$ 18	-21.4 $\pm$ 0.3	AD1265-1285 (68.2%)	AD1260-1290 (95.4%)	方形基壇の下層、柱穴の床面の下の盛り土の中の炭化物
La Paz 92	TKA-17307	667 $\pm$ 18	-26.9 $\pm$ 0.3	AD1285-1310 (40.2%), AD1365-1385 (28.0%)	AD1280-1310 (53.6%), AD1360-1390 (41.8%)	方形石造基壇を覆う粘土から採取した炭化物

表2 ラ・パス遺跡のC14年代測定結果 (東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室)



図7 ラ・パス遺跡、マウンド1西側の床面2と柱穴

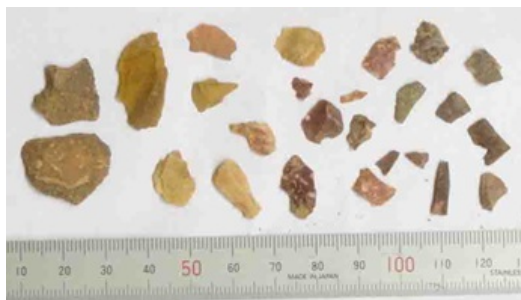


図8 ラ・パス遺跡、マウンド1西側、床面2の上の盛り土から出土した細石器

る「床面2」が確認された。柱穴らしき掘りこみがあり（図7）、床面2を覆う盛り土からは5～20ミリの不定形の小さな剥片が多数出土した（図8）。この盛り土から得られた試料の年代は11世紀後半から13世紀であり、床面2が埋められた年代はこれより後である。

さらに、方形基壇が築かれた70センチ下まで遺物包含層が続く。最下層では粗製土器がわずかに出土しており、AD600-665というC14年代が得られている。

方形基壇はマウンド西側でその一部を確認したに過ぎなかったため、マウンド東側でも発掘調査を行い内部の遺構を探索した。しかし、現在までいかなる石壁も発見されていない。東側では、西側で基壇が検出された地点よりも、深く内部まで発掘が行われたにもかかわらず石壁は発見されなかったことから、方形基壇は小規模なものであると予想される。

さらに、マウンド上面でも試掘を行ったが、床面などの遺構は確認されなかった。この試掘で採取された炭化物のC14年代が185-50BCを示し、非常に古い時代に人間活動があった可能性を示唆している。ただし、出土土器、表採土器ともにテンピスケ期（400BC-AD300）と認識できるものは、これまでのところ皆無である。



図9 ラ・パス遺跡、埋葬地区

マウンドから、約100メートル東の地点では集団埋葬墓が発見されている。2017年の発掘で6つの甕棺が出土し、甕棺に蓋として被せられた土器、副葬された土器も出土している（図9）。時間的制約から10.25平方メートルを発掘しただけであり、この集団埋葬がさらなる広がりを持つことはほぼ確実である。未だ内部の土を取り出す作業をしていないものもあるが、内部を確認した3つの甕棺からは、いずれも保存状態が悪い人骨が出土した。成人の骨が入っていたものが2個と、成人の骨と幼児の骨が混ざっていたものが1個ある。特筆すべきは、埋葬6と名付けた甕棺の中から出土した遺物であり、人骨とともに、小型の完形土器が1点、多彩色土器の口縁部分の破片が1点、魚の脊椎の破片が1点出土した。この完形土器はムリーヨ・アップリケ（Murillo Applique）土器、口縁破片はバジェホ（Vallejo）多彩色土器と呼ばれ、両方ともオメテペ期の特徴的な型式である（図10）。埋葬6の人骨のC14年代はAD890-1150であり、現行編年でオメテペ期の絶対年代とさ



図10 ラ・パス遺跡、埋葬6の甕棺内から出土した土器片と完形土器

110センチまでで、土器片が約300点、石器71点以上が出土した^(註2)。これ自体は大した数ではないが、動物骨(図11)、炭化物、焼土が大量に出土しており、同定されたものとしてはシカの肋骨、大腿骨、寛骨、頭骨、顎骨、イノシシ類の顎骨、中足骨、ウサギの顎骨、食虫類の顎骨がある^(註3)。魚骨も多く出土している。また、チアマティーヨほどではないが、土器片の両側に抉りを入れた漁具の錘と思われるものも出土している。それに対して、トウモロコシ農耕と関連する遺物は見あたらない。トルティーヤ(tortilla)を調理する土製フライパンであるコマル(comal)も出土しない。トウモロコシなどの種子類を挽くための磨製石器については、マウンド頂上部の試掘と2019年の試掘調査でメタテ(metate、石皿)の破片がそれぞれ1点出土したことを除くと、マノ(mano、石棒)・メタテは、マウンドを覆う石材の中から破片が数点回収されているだけである。



図11 ラ・パス遺跡、試掘坑4出土動物骨

以上まとめると、ラ・パス遺跡のマウンド1周辺では、紀元前から人間活動があった可能性があるが、土器が出土するのは7世紀からである。これらは散発的な出土であり、関連する建築活動の痕跡は発見されていない。その後、掘っ立て柱式の建物が建てられた。建築の年代は詳しくは分らないが、土器から見ればサポア期以降である。微細な剥片がまとまって出土することから、付近で石器が製作されていたか、あるいは意図的に埋納されたと推測される。この建物は11世紀後半以降に埋められてしまう。

一方、早ければ10世紀には、マウンド(当時はおそらく掘っ立て柱式建物)から100メートルほど東の地点で甕棺埋葬が行われていた。C14年代から見て、その後も埋葬は続いた可能性がある。

そして13世紀には、掘っ立て柱式建物があつた地点にさらに盛り土がされ、その上に小規模ながら方形の石造基壇が建設される。上部構造は有機質の材料で建てられたが、この建築様式はニカラグア太平洋岸では未だ類例を見ない、極めて稀な遺構として注目すべき、メソアメリカ的な文化要素である。おそらくは儀礼が行われた祭祀の場であつたであろうと推測される。しかし、13世紀終わりから14世紀にかけてのある時点で、この石

れるAD1350-1550よりもはるかに古い。なお、残り二つの甕棺から採取した骨と炭化物からは、11世紀後半から13世紀前半の年代が得られた。

2019年の発掘では、マウンドから離れた4つの地点で試掘を行った。このうち3つでは遺物の出土は希薄であったが、マウンドから最も遠く、湖に近い試掘坑4で多くの遺物が出土した。湖岸から約90メートル、マウンド1から約190メートル西に掘られた1平方メートルの試掘坑であり、遺物包含層は地表下

造方形基壇は粘土で覆われたあと大量の石と土砂によって埋められて、円形のマウンドに造り変えられる。ラ・パス遺跡のC14年代で最も新しいものは、石造方形基壇を覆う盛り土から得られたAD1280-1310、AD1360-1390である。前述のように、このマウンドでは食料調理などの日常生活の痕跡は希薄である。

甕棺埋葬が行われた集団墓からさらに100メートルほど東の湖岸近くには居住区が広がっていたと思われる。試掘調査で大量の動物遺存体が出土し、一部は焼けていた。土器や石器とともに、炭化物や焼土片も出土しており、居住に伴う廃棄物の堆積と見て間違いないであろう。ラ・パスは、祭祀遺構（マウンド）、埋葬地区（甕棺の集団墓）、居住地区を備えた遺跡であるといえる。

マウンドの発掘、埋葬地区の発掘、2019年の4か所の試掘を通して、出土する土器は、ほぼすべてサボア期・オメテペ期の土器であり、C14年代と矛盾しない。

石器について補足すると、大部分は不定形の剥片であり、磨製石器は上述のようにごく少量である。掘っ立て柱式建物の床面2を覆う盛り土からの多数の細石器の出土を除けば、目を引くものはない。石材は玄武岩、チャート、玉髄、安山岩などである。黒曜石も出土するが1センチ以下の微細な剥片ばかりである。2019年に行った上記の試掘では、71点かそれ以上出土した石器のうち黒曜石は9点あり、石刃は無かった。

ラ・パスの出土品の分析は今後継続的に行われるが、現段階では、動植物依存体の出土の多さからは、やはり狩猟や漁労に依存した生業形態が予想される。植物遺存体は、マウンド最深部の盛り土の中から保存状態の良いマメ科の植物遺存体が出土しているが、関連する遺構や遺物はみあたらず、重要な意味のあるものとは思えない。

3. 土器編年の問題

上記のマナグア湖畔のチラマティーヨとラ・パス両遺跡の発掘調査の成果を、当該地域の考古学の大きな枠組みの中に位置づけるとどうなるだろうか。まず、土器編年の問題がある。

チラマティーヨ、ラ・パスともに、スペイン人到来直前の時代であるはずのオメテペ期の土器の年代が大幅に古くでている。両遺跡でのC14年代測定を総合すると、現行の土器編年でAD1350-1550年とされるオメテペ期に対して、実際には10世紀から13世紀の年代が得られているのである。

上述のように、この問題は既に2000年代からニカラグア湖周辺の遺跡の調査で提起されていた。これは、カルガリー大学がもう一方の大湖であるニカラグア湖周辺で行った3つのオメテペ期の遺跡の発掘調査結果によるものであった。まず、リバス（Rivas）県のサンタ・イサベル（Santa Isabel）は、スペイン人到来時のニカラオの中心的居住地であるカウカポルカ（Quahucapolca）であると考えられていた遺跡だが、発掘調査で得られた12個のC14年代からは、居住があったのはAD890-1280と判明した〔McCafferty and Steinbrenner 2005〕。さらに、グラナダ（Granada）県のテペタテ（Tepetate）遺跡ではオメテペ期の年代としてAD990-1070、AD1100-1180という結果が得られ、同県のエル・ラヨ（El Rayo）遺跡でもAD1100-1150頃までしか人間活動がないことがわかった〔McCafferty 2010: 3〕。これらはいずれも、現行編年でいうサボア期の絶対年代におさまる。そして、サボア期の土器とオメテペ期の土器が共伴することは、マナグア湖畔のチラマティーヨの層位的発掘でも確認されている。

この現象は、実はニカラグアでは以前から知られていた。サボア期とされるサカサ（Sacasa）刷毛目文土器の甕棺にオメテペ期の土器であるバジェホ多彩色土器が蓋として用いられ共伴状態で出土することが経験的に知られていたのである（註4）。

14 世紀後半以降の土器であるはずのオメテペ期の土器は、実際には遥かに古い年代をもつ。そして、これが局地的な現象でないことは、現実として、コスタリカ北西部グアナカステ (Guanacaste) 県のクレブラ (Culebra) 湾岸の発掘でも 1990 年代から示されていた。ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部はひとつの土器文化圏を構成する。両者の間では相違点が指摘されることもあるが、現在のところ共通の土器編年が用いられている [Abel-Vidor et al. 1990]。クレブラ湾岸のマンサニーヨ (Manzanillo) 遺跡の「埋葬 2」にムリーヨ土器が副葬されており、埋葬人骨から得られた C14 年代は AD975-1235 であった。調査者はこれについて「ムリーヨ土器の初期に現れるバラエティが、一部サポア期にまで入り込んでいる」として、現行編年と現実の調査結果の間で何とか整合性を保とうとしている [Hernández 1998: 109-110]。

ラ・パスの埋葬 6 で出土したムリーヨ土器は AD890-1150 であり、マンサニーヨよりもさらに古い可能性がある。また、たびたび指摘しているように、サポア期の土器とオメテペ期の土器は多くの場合混在しており、これらの事実を総合すると、やはり両者は大部分並行しているのではないかと考えられる。

なぜこのような矛盾が生じているのであろうか。当該地域の現在の編年が確立されたのは 1994 年であるが、当時オメテペ期に AD1350-1550 という絶対年代を与えた根拠はわずか 6 つの C14 年代だった (表 3、[Vázquez et al. 1994: 250, Cuadro 1])。そして、その 6 つ C14 年代のうち 5 つはコスタリカで得られたものであり、しかも、うち 3 つは同一遺跡のものであった。オメテペ期の絶対年代が少数の C14 年代をもとに設定されたことに留意するべきであり、その後の発掘調査結果の蓄積とともに、修正が迫られていることは明らかである。

	遺跡名	遺跡所在地	14C年代(BP)	較正年代
Tx-5079	ドス・アルマディーヨス(Dos Armadillos)	ティララン山脈、コスタリカ	570 ± 30	AD1310-1430
GsY-98(2)	ラ・ボカーナ(La Bocana)	テンビスケ谷、コスタリカ	554 ± 85	AD1290-1480
GsY-89 ⁹	ラ・ボカーナ(La Bocana)	テンビスケ谷、コスタリカ	516 ± 61	AD1310-1480
Hv-2692	サン・ラサロ(San Lázaro)	リバス、ニカラグア	505 ± 30	AD1400-1450
GsY-98(1)	ラ・ボカーナ(La Bocana)	テンビスケ谷、コスタリカ	478 ± 85	AD1310-1640
Y-814	ミラマール(Miramar)	サンタ・エレナ半島、コスタリカ	220 ± 100	AD1450-1960

表 3 1994 年当時得られていたオメテペ期の C14 年代 (Vázquez et al. 1994: 250, Cuadro 1 より作成)

オメテペ期の年代は実は古いもので、大部分がサポア期と並行するとすれば、土器編年に空白が生じることになる。「真の後期の土器」、つまりスペイン人到来直前の 14 世紀後半から 15 世紀の土器や遺跡はどこにあるのであろうか。

ラ・パス遺跡の最も新しい C14 年代は AD1280-1390 であるから、ニカラグア湖周辺の遺跡の測定値よりもかなり時代は下ってはいる。オメテペ期の年代が 14 世紀にかかっているようにも見える。とはいえ、これは方形基壇を覆う粘土の中からオメテペ期の土器が出土しているもので、一次堆積である保証はない。

今後の課題は、未だ土器型式が確立されていない粗製土器や、現在ひとつの型式として分類されている土器型式の中から「真に後期の土器」であるバラエティを抽出・分離することである。一例としては、チラマティーヨ遺跡では、未だ土器型式が確立されていない土器であるが、頸部に大きな刺突文帯が巡る土器が上層 (1~4 層) でのみ出土しており、「真に後期の土器」の候補ではないかと考えられる [長谷川 2016: 235-236]。

ところで、この編年の問題はメソアメリカ系民族のニカラグア太平洋岸への移住をめぐる問題とも関連しており、次節ではこれについて論じる。

4. メソアメリカ的文化要素の欠落

2000年代にカルガリー大学によって行われたニカラグア湖周辺の発掘調査の結果から提起された問題としては、土器編年の再検討の他に、メソアメリカ的文化要素の欠落という事実があった[McCafferty 2010, 2011, 2015]。メソアメリカ系民族の居住地と想定される遺跡にもかかわらず、土器以外にそれらしき痕跡が発見されないものである。そして、マナグア湖畔の二遺跡で得られた知見もこれと符合している。

ニカラグア太平洋岸がメソアメリカの一部とされる根拠はまず第一に言語学と歴史資料である。さらに、考古学的に見れば、白色やそれに近い淡色のスリップ（化粧土）の上に「羽毛の蛇（Quetzalcoatl）」などの神格や階段文様（ギリシア雷文）といったメソアメリカ的な図像が多彩色で描かれる「ニコヤ（Nicoya）多彩色土器」と呼ばれる土器群が設定され[Lothrop 1926]、この中でも、かつての当該地域の編年でいう「多彩色土器中期（Middle Polychrome Period）」のパペガヨ（Papagayo）多彩色土器をはじめとした一連の土器が Cholotega の移住を反映しており、「多彩色土器後期（Late Polychrome Period）」のバジェホ多彩色土器に代表されるいくつかの土器が Cholotega に数世紀遅れて移住したニカラオによってもたらされたものとされた[Healy 1980: 336-337]。

しかし土器の図像以外の考古学的データを見ると、マナグア湖畔の遺跡ではトウモロコシの植物遺存体は出土していないし、コマルも出土しない。古典期マヤ文明では、トウモロコシの調理法としてはトルティーヤよりもタマル（tamal）が一般的だったという見解もあり[Taube 1989]、コマルの不在が必ずしもトウモロコシの不在を示すのではないともいえる。とはいえ、これがメキシコの後古典期の遺跡では広範に出土する遺物である以上[McCafferty 2015: 114; Taube 1989: 33]、その時期にメキシコから人々が移住したとされる場所で全く出土しないのは不自然である。植物を加工するマノとメタテは、ラ・パスのマウンド1の葺き石などとして、少数の破片が出土するのみである。両遺跡ともに黒曜石はわずかで、石器が多く出土するチラマティーヨでも、発掘と表面採集を含めて小剥片が11点得られたのみであった。ニカラグアの北に位置するマヤ地域やメキシコ中央高原では、黒曜石石器は交易品として広範に流通し、全ての社会階層で日常的に使用され、経済的役割のみならず宗教儀礼の意味すら持った[青山 2007: 25-29]。それが、わずかししか出土しないことは特筆すべきである。また、土偶や香炉などメソアメリカらしさをもった遺物もみあたらない。

ニカラグア湖周辺の遺跡の発掘調査でも、土器の図像以外にはメソアメリカ的文化要素はほとんどなかったという。サンタ・イサベルのマウンドは、発掘の結果、石積みではなく干しレンガや木舞壁の質素なものであることが判明した[McCafferty and Steinbrenner 2005]。3つの遺跡のいずれでもトウモロコシの植物遺存体や植物化石は見当たらず、ラスパディータ（raspadita）と呼ばれるチャート製の細石刃が多く出土した。これらは、有毒マニオクをすりおろして調理するためのおろし金ではないかと推測されている[Debert and Sheriff 2007]。黒曜石の出土も少なく、出土した動植物遺存体の分析からは魚類、カメなどの湖の水棲動物や、シカ、アルマジロ、鳥類などの陸棲の野生動物、豆、ヤシが多く消費されていたことが分かった[McCafferty 2010]。

つまり、メキシコから民族移動があったという時期の遺跡にもかかわらず、その生業はトウモロコシ農耕民というメソアメリカ的生活様式から遠ざかっているように見える。実はこれもコスタリカの太平洋岸でも見られる現象である。1990年代のクレブラ湾岸の遺跡の調査では、以下のような事実が明らかになった[Gómez 1998; Hernández 1998]。バガセス期には埋葬の上に石を積んでマウンドが建設されたが、サポア・オメテペ期には埋葬が貝殻や土器片の堆積で覆われて、貝塚が埋葬マウンドを形成するようになる。魚介類への依存はバガセス期から続いているが、サポア・オメテペ期に入り強化される。ストロンブスに加えて、ホタテ、サザエの類が増加し、潜水、鉈、仕掛け網などの技術と道具を用いなければ獲れないタイ科などの魚類の骨も出土するようにな

る。そして、ここでも多彩色土器の図像の他には、これといったメソアメリカ的な要素は見られない。

ところで、ニカラグア湖とマナグア湖の湖岸、クレブラ湾岸で後古典期に入って漁労・採集への依存が増し、トウモロコシ農耕民という生業形態から離れてゆくとしても、湖岸や海岸の居住地であれば、水産資源に依存するのはごく自然なことにも思われる。しかし、ここで1980年代に行われたアヤラ (Ayala) 遺跡をはじめとしたニカラグア湖北西岸のグラナダ地域の調査 [Salgado 1996; Salgado and Zambrana 1994] に注目したい。アヤラは、湖から約8キロ内陸に入った肥沃な丘陵地帯に位置し、アヤラ期 (AD650-950) には地域のセンターと言うべき中心的村落であり、マメ科植物、カカオ、アボカドなどの他にトウモロコシの遺存体が4点出土している。ところが、次のコシボルカ (Cocibolca) 期 (AD950-1150) になると、アヤラは急激に衰退して人口が縮小したようで、トウモロコシも出土しない。時を同じくして、ニカラグア湖岸のテペタテが新しいセンターとして繁栄し、祭祀・埋葬センターとしてエル・ラヨもまたアセセ (Asese) 半島の先端に営まれる。その他の小規模集落も湖岸に立地するものが多くなり、全般的に人口が湖に向かって移動していることが明らかである。繰り返しになるが、これらの遺跡ではトウモロコシは出土せず、湖の水産資源に依存した生活が推測される。古典期終末期、あるいは後古典期の初頭、メソアメリカからの民族集団の移住が起こっていたと考えられる時代、農耕に適した丘陵地帯の集落は衰退し、代わって湖岸にセンターや集落が出現するのである。

また、アヤラに関していえば、黒曜石の出土状況が興味を引く [Salgado 1996: 255, Table 6.2]。アヤラ期では出土した打製石器1124点のうち186点 (16.5%) が黒曜石であるが、コシボルカ期では147点のうち7点 (4.8%) と減少し、ホルテバ (Xalteva) 期 (AD1150-1522) では再び出土量が増加し、166点のうち32点 (19.3%) が黒曜石である。ただし、グラナダ地域を含むニカラグア太平洋岸の全体的な土器編年でサボア期とオメテペ期が並行している疑いが濃いことを考えれば、コシボルカ期とホルテバ期はひとつにまとめて、313点中の39点 (12.5%) が黒曜石であるとしたほうが、実態に近いであろう^(註5)。マカーファティー [McCafferty 2010] によれば、同じくグラナダ地域のサボア・オメテペ期の遺跡であるテペタテでは8%、バガセス期からサボア・オメテペ期に続くエル・ラヨでは1%が黒曜石である^(註6)。

黒曜石に関しては、ニカラグアでは、アヤラ遺跡とホンジュラス国境に近い北部のグイリグイスカ (Guiliguiska)、カクリー-I (Caculí-I) の両遺跡 (ともにバガセス期) で出土黒曜石の原産地についてのデータがある [Braswell 1997: 25, Tabla 2]。いずれの遺跡でも距離的に近いホンジュラスのグイノペ (Guinope) 産の黒曜石が大部分を占めており、マヤ地域で大量に流通するグアテマラ産のものは少ない。バガセス期のアヤラでは87.8% (N=336)、グイリグイスカでは84.6% (N=52)、カクリー-Iでは90.9% (N=11) がグイノペ産である。メソアメリカで製作され、流通する黒曜石製石器はその大部分がプリズマティック・ブレード (prismatic blade) と呼ばれる押圧剥離で得られる定型の石刃であるが、グイノペの原石は十分な大きさがなく、これを製作するのは困難であるという。ニカラグアで出土する定型の石刃はごくわずかであり、それは石刃製作に適した材料が入手困難だったからであることは容易に推測できる。さらに、北部の2遺跡の黒曜石石器の平均重量が7.6グラムであるのに対してアヤラでは0.9グラムである [ibid: 22] ことを考慮に入れば、石刃製作に適した黒曜石は北から南に向かうに従って急激に供給が減っていると言える。

メソアメリカ南東部の各地で出土した黒曜石の原産地に関するデータも概観してみる。いずれも肉眼鑑定だが、古典期マヤ文明東の都と呼ばれ、ホンジュラス西部のグアテマラ国境近くに位置するコパン (Copan) 遺跡では、古典期後期の王宮とされる建造物10L-2から出土した19,905点の黒曜石のうち、98.3%がイシュテペケ (Ixtepeque)、1.2%がエル・チャヤル (El Chayal) のものである [Braswell et.al. 1995: 128, Figura 1]。これらはグアテマラ高地の黒曜石で、マヤ地域で大量に流通していた定型の石刃を取ることができる大きさの原石が得

られる。コパンから東へ60キロほどのラ・エントラダ (La Entrada) 地域では、古典期後期のコンテキストから出土した1,323点のうち、イシュテペケが73.2%でエル・チャヤルが0.8% [Aoyama 1994: 141, Table 4]、エル・サルバドル東部の先古典期から古典期にかけてのセンターであるケレパ (Quelepa) 遺跡では、577点のうち、イシュテペケが98.3%、エル・チャヤルが1.6%であり [Braswell et al. 1995: 128, Figura 1]、いずれもグアテマラ産の黒曜石が大部分といてよい。

対して、ニカラグアでは前述のように、アヤラ、グイリグイスカ、カクリー1のいずれの遺跡でも大部分を占めるのはホンジュラスの黒曜石であり、定型の石刃を製作することは困難だった。この対比は明確であり、それゆえプラスウェルらは、黒曜石から見ればメソアメリカの南限はホンジュラス、エル・サルバドル、ニカラグアの国境が集まるフォンセカ (Fonseca) 湾であるとしている [Braswell et al. 1995: 126]。

チラマティーヨでは、多様な石材からなる不定形の剥片が大量に見つかっており、マナグア湖の水上交通を通した石材の集積が行われた可能性があるが、大部分の石材は玄武岩であり、黒曜石はわずかである。しかも、とても道具であるとは思えないような1センチ前後の小剥片しかみつからない。生業体系やその他の文化要素にメソアメリカ的なものが希薄であるのに加えて、遠距離を動くことが最も容易で、地域間交換の指標となる石器の材料でさえも、ニカラグア太平洋岸にはわずかししか届いていない。

そういったなか、注目すべきはラ・パス遺跡である。13世紀、それまで掘っ立て柱式の建物があつた場所に方形石造基壇が建設されるという画期的な出来事が起こる。方形の建造物はメソアメリカ的であり、それ以南の地域では円形の建造物が主流である。ただし、この特筆すべき建造物もそのままの形で更新されることはなく、13世紀終わりから14世紀に盛り土で覆われ、円形マウンドに造り変えられてしまう。

5. メキシコからの移民は来たのか

以上のように、考古学的にはメキシコからの移民が来たようには見えない。一方で、先住民言語の分布と植民地時代に書かれた年代記は、移住があつたことを明確に述べている [Esgueva 1996: 20-36]。現状では、考古学と言語学およびエスノヒストリーの間に乖離が生じている。

考古学的文化におけるメソアメリカ的要素の希薄さからは、AD800頃チョロテガが移住し、在地の人々を征服または殲滅してニカラグア太平洋岸をメソアメリカ化したという図式は成り立たない。もっとも、AD800前後には以下のような変化が考古学的にも認識できる。まず、メソアメリカ的な図像を持つニコヤ多彩色土器と総称される土器様式が現れる。甕棺葬が増加する。さらに、グラナダ地域で見られるようなセトゥルメント・パターンの変化がある。ただし、そういった変化のうち、多彩色土器の図像以外にはこれといったメソアメリカ的な文化要素はない。

またAD1350頃に遅れてニカラグア太平洋岸に移住していたニカラオが新しい土器型式をもたらしたという図式も成り立たない。そもそも、サボア期とオメテペ期に年代的な差は認められない。大規模な移住が二度起つたというような証拠はなく、編年の問題はまだまだ混々としていいる。

マナグア湖周辺では、この時代の考古学文化は多様である [長谷川 2016]。建造物は、ラ・パスのように大規模円形の石造マウンド、方形石造基壇、マナグア市のネハパ (Nejapa) 遺跡の小規模円形石造マウンドがあり、チラマティーヨには地表に建築遺構が見られない居住遺跡がある。また、埋葬様式は、この時期のニカラグア太平洋岸では甕棺埋葬が多いものの、マナグア市のロス・マルティネス (Los Martínez) 遺跡のように、石郭墓、甕棺埋葬、副葬品を伴う直葬が混在する例もあり^(註7)、多様性が見受けられる。物質文化を民族と同一視する

ことの是非はさておき、異なる物質文化を持つ人々が共存していた可能性がある。

後古典期ニカラグア太平洋岸に北からの移住があったとして、それはメキシコからの直接的で大規模な民族移動ではなく、おそらくは中継地を通しての間接的なもので、小規模、漸次的な移住だったのではないだろうか。その移民たちも、在地の人々と共存、混淆して、現地の社会に与えた影響力は限定的だった。そして、移住者たちは、湖の水産資源の利用など独自の生業形態を発達させて、環境に適応していった。ラ・パスではメソアメリカ的な方形石造基壇が建設されるが、それはチョロテガが移住したとされるAD800頃ではなく、13世紀である。そして、それがやがて埋められて、同じ建築様式では更新されず、円形マウンドに造り変えられることは、移民と在地の人々の共存、混淆という過程を象徴しているように思われる。

グレナダ地域のエル・ラヨでは、ある意味これと似た現象がみられる〔McCafferty and McCafferty 2017〕。この遺跡ではもっぱら祭祀・埋葬遺構が見つかった。興味深いのは「遺構1 (Locus 1)」と呼ばれる地点で、バガセス期からサポア期にかけての埋葬が連続している。時期をまたいで、埋葬様式は直葬から甕棺葬へと変わり、土器型式も変化するにもかかわらず同じ場所に、前時代の埋葬にかぶせるように新しい埋葬がなされる。さらに「遺構2 (Locus 2)」ではバガセス期からサポア期にかけての大型の完形土器や食物残渣が出土している。埋葬に伴う饗宴が行われた可能性があり、しかもこれも時期をまたいで継続している。調査者らはこれをもって、サポア期の始まりにこの地域で人間集団が置き換わったとは考えられないとしている。

6. 比較文明論的視点から

先スペイン期のアメリカ大陸では言語の分布は概してモザイク状である。これは征服活動や民族移動が活発ではなかったことの証左と思われる。メソアメリカを見ると、チョロテガは、サポテカ、ミシュテカ (Mixtec) などとともにオトマンゲ (Otomangue) 語族を形成している。ニカラオは、ナワトル (Nahuatl) 語を話しアステカ王国を建国したメシーカ (Mexica) と同じく、ユト・アステカ (Uto-aztec) 語族に属する。ユト・アステカ語族は、アメリカ合衆国南西部からメキシコ、そして中央アメリカにかけての広範な分布を持つ、例外的に「よく動く民族」のように見える。オトマンゲ語族はメキシコのチアパス (Chiapas) 州とオアハカ (Oaxaca) 州を中心に分布する。エル・サルバドルには、やはりユト・アステカ語族のピピル (Pipil) が分布していたが、チョロテガ、ニカラオいずれの場合も、ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部がこれらの語族の分布の南限である。要するに、メソアメリカ系の言語が、太平洋岸に沿って、ラマ (Rama)、ウルヴァ (Ulva)、マタガルパ (Matagalpa) など、南方系の言語であるマクロ・チブチャ (Macro-Chibcha) 語族の分布するニカラグアとコスタリカに入り込んでいるように見える。

南アメリカでこれに匹敵する広範な分布を示す民族は、クスコ (Cuzco) 盆地から広がって北はコロンビアから南はチリに至る大帝國を建設したケチュア (Quechua) 語族のインカ (Inca) であろう。ただし、両者を比べると、相違点も浮かび上がる。インカは他民族を直接統治して帝国支配を行い、王族の血筋を引く集団をあえて辺境防衛のために遠隔地に移住させることまでした〔ロストウォルスキ 2003: 237-238〕。これに対して、婚姻や同盟や政治的つながりのネットワークを基盤としたアステカの支配は、地方自治を許して貢納品を取り立てる間接統治だった〔タウンゼント 2004: 146〕。メソアメリカ南端まで到達したニカラオやチョロテガが、少なくとも物質文化の面でメソアメリカらしさを失ってしまうのは、ある意味これと類似した現象のように思える。何がインカとアステカを分けているのかは興味深い設問である。

インカの場合、おそらくは、前近代において世界有数の道路網であったインカ道の建設が帝国支配を可能な

らしめた大きな要因だった。そして、その背景には大量輸送の手段を提供するリヤマというラクダ科動物の家畜の存在があったのだろう。製鉄技術がなく、車輪も構造船も欠いた先スペイン期アメリカ大陸にあって、さらに家畜といえば犬と七面鳥しかいなかったメソアメリカでは移動と輸送手段の制約は大きく、ニカラグア、コスタリカにまで南下した Cholotega やニカラオも、時とともに故郷とのつながりを弱めていった。故郷から遠く離れた マナグア湖畔やニカラグア湖畔の環境に適応するために、新しい生業を発達させ、在地の民族集団と共生しながらその物質文化を急速に変容させていった。その中で、かろうじて言語や宗教などエスノヒストリーに記録されているような文化的アイデンティティを保っていたのであろう。

このように書くと、あたかも Cholotega やニカラオが「中央」から隔絶された「辺境」でとり残された人々であるかのような印象を与えるが、16 世紀のスペイン人が書いた年代記はマナグア湖畔の町々の稠密な人口と繁栄を描いている。それを信じるならば、彼らは中央とのつながりや固有の文化伝統には固執せず、思い切った生存戦略で成功した開拓者ともいえる。移民、難民が世界的問題になっている現在、先スペイン期アメリカの未だ実態が解明されていない民族移動について知ることは、人はなぜ危険を冒してまで見知らぬ土地へと旅立つのかを考える材料を与えてくれるかもしれない。

【謝辞】

本論は、平成 26～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」の「メソアメリカ比較文明論」（代表：青山和夫、課題番号 26101003）に対する助成を受けて行われました。

註

- (註 1) ニカラグア湖は別名をコシボルカ (Cocibolca) 湖、マナグア湖はショロトラン湖 (Xolotlan) という。ニカラグア国内ではこの呼び方が一般化しているが、国際的な慣行に従ってここでは旧来の名称を用いる。
- (註 2) 2019 年に行われた遺物の詳細な分析はいまだ行われておらず、遺物台帳作成のために土器片や石器の数を数えているが、総数はわずかに増加する可能性がある。
- (註 3) ラ・パス遺跡、試掘坑 4 出土の動物骨の写真鑑定は、東亜大学の鶴沢和弘先生と北海道大学の江田真毅先生にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。
- (註 4) これらバジェホ多彩色土器とサカサ刷毛目文土器を組み合わせた甕棺埋葬墓は、建設工事や耕作による偶然の発見が多く、報告書はほとんどない。マナグア県シウダー・サンディーノ (Ciudad Sandino) 市、オロ・ベルデ (Oro Verde) 遺跡の例は、市の考古学担当職員による発掘であり、報告書 [Zambrana 2013] は市役所の行政文書として存在しているが一般向けには刊行されていない。
- (註 5) アヤラ期は AD650-950 のおよそ 350 年間、コシボルカ・ハルテバ期を合わせると AD950-1522 で 600 年近くになるが、アヤラ遺跡の発掘で得られた最も新しい C14 年代は AD1040-1290 であり [Salgado 1996: 437, Table D.3]、ここでもまたオメテペ期やハルテバ期の絶対年代の下限とされる 16 世紀よりもはるかに古い時期に終わっている。
- (註 6) これらの打製石器の総数は記されておらず、今後の報告書の刊行で明らかにされると思われるが、一例としエル・ラヨでは「遺構 4」から出土した 1066 点の打製石器のうち黒曜石は 4 点、「遺構 6」から出土した 254 点には黒曜石はなく、「遺構 7」から出土した 1239 点の打製石器のうち黒曜石は 6 点であったという [Geoffrey McCafferty 私信、2019 年 8 月 6 日]。

- (註7) ロス・マルティネスの発掘調査は、マナグア市の廃棄物埋め立て処分場設置のために行政発掘として行われ、報告書〔Zambrana 2012〕は市役所の行政文書としては存在しているが一般向けには刊行されていない。

参考文献

青山和夫

2007 『古代メソアメリカ文明—マヤ、テオティワカン、アステカ』 講談社選書メチエ。

長谷川悦夫

2016 「中央アメリカ、ニカラグア共和国マナグア湖畔の考古学調査」 『埼玉大学教養学部紀要』 51(2) pp. 223-241。

ロストウォルスキ、マリア

2003 『インカ国家の形成と崩壊』 東洋書林

タウンゼント、リチャード

2004 『図説アステカ文明』 創元社。

Abel-Vidor, Suzane, Claude Baudez, Ronald Bishop, Leidy Bonilla, Marlin Calvo, Winifred Creamer, Jane Day, Juan Guerrero, Paul Healy, John Hoopes, Frederick Lange, Silvia Salgado, Robert Stroessner, and Alice Tillet

1990 Principales Tipos Cerámicos y Variedades de la Gran Nicoya, *Vínculos*, Vol.13 (1987), pp. 35-317. Museo Nacional de Costa Rica, San José, Costa Rica.

Aoyama, Kazuo

1994 Socioeconomic Implications of Chipped Stone from the La Entrada Region, Western Honduras. *Journal of Field Archaeology* 21:133-145.

Braswell, Geoffrey

1997 El intercambio comercial entre los pueblos prehispánicos de Mesoamérica y la Gran Nicoya. *Revista de la Universidad del Valle de Guatemala* 6:17-29.

Braswell, Geoffrey, Silvia Salgado and Michael Glascock

1995 La obsidiana guatemalteca en Centroamérica. In VII simposio de investigaciones arqueológicas en Guatemala, 1994, vol. 1, edited by J. P. Laporte and H. Escobedo, pp. 121-131. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Briz, Ivan, Albert Flores, Emengol Gassiot y Beatriz Palomar

1999 Excavación de un montículo precolombino en el Pacífico de Nicaragua: Sitio El Apante, León (N-LE-19). *Vínculos*, Vol.24, pp. 95-120. Museo Nacional de Costa Rica, San José, Costa Rica.

Chapman, Anne

1960 *Los Nicarao y Los Chorotega según las Fuentes Históricas*, Publicaciones de la Universidad de Costa Rica, Serie Historia y Geografía, No.4. San José, Costa Rica.

Debert, Jolenne and Barbara Sherriff

2007 Raspadita: a new lithic tool from the Isthmus of Rivas, Nicaragua. *Journal of Archaeological Science* 34, 1889-1901.

Esgueva, Antonio

- 1996 *La Mesoamerica nicaraguense: documentos y comentarios*. Universidad Centroamericana, Managua, Nicaragua.

Espinoza, Edgar

- 1995 La Cerámica temprana de Nicaragua y sus vínculos regionales. In *Descubriendo las Huellas de nuestros antepasados: El Proyecto Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua*, edited by Frederick Lange, pp.17-24. Alcaldía de Managua.

Gómez, Ivonne

- 1998 El Conchal: Reflejo de la Vida Cotidiana, *Vínculos*, Vol.22, pp. 45-78. Museo Nacional de Costa Rica, San José, Costa Rica.

Haberland, Wolfgang

- 1992 The Culture History of Ometepe Island: Preliminary Sketch (Survey and Excavations, 1962-1963), In *The Archaeology of Pacific Nicaragua*. F. Lange et al. editors, pp. 63-117.

Hasegawa, Etsuo

- 2017 Excavaciones en el sitio Chilamatillo (N-Ma-8-100), Municipio de Tipitapa, departamento de Managua, Nicaragua. *Revista Mi Museo y Vos*. Año 11, No. 33:24-37.

Hasegawa, Etsuo, Jorge Zambrana, Mario Solano and Orvin Zambrana

- 2019 Excavaciones en el sitio La Paz y Reconciliación, municipio de Mateare, Departamento de Managua, Nicaragua. *Revista Mi Museo y Vos*. Año 13, No. 34:2-29.

Healy, Paul

- 1980 *The Archaeology of Rivas Region, Nicaragua*. Winifred Laurier University Press, Ontario.

Hernández, María

- 1998 Manzanillo: Sitio Costero Multicomponente en la Bahía Culebra,” *Vínculos*, Vol.22, pp. 79-124. Museo Nacional de Costa Rica, San José, Costa Rica.

Hoopes, John W.

- 1994 The Tronadora Complex: Early Formative Ceramics in Northwestern Costa Rica, *Latin American Antiquity* 5(1): 3-30.

Lothrop, Samuel

- 1926 *Pottery of Costa Rica and Nicaragua*. 2 vols. Museum of American Indian, Heye Foundation.

McCafferty, Geoffrey

- 2010 Ten Years of Nicaraguan Archaeology. Paper prepared for the 2010 Meeting of the Society for American Archaeology, Sacramento, California.
- 2011 Etnicidad chorotega en la frontera sur de Mesoamérica. *La Universidad* #14-15, pp.91-112, Universidad de El Salvador.
- 2015 The Mexican Legacy in Nicaragua or Problems when Data Behave Badly. *Archaeological Papers of the American Anthropological Association*, Vol.25: 110-118.

McCafferty, Geoffrey and Sharisse McCafferty

- 2017 El Rayo: A Necropolis from the Bagaces/Sapoa Transition in Pacific Nicaragua. Paper prepared for the RED Centroamericana,

San Jose, Costa Rica.

McCafferty, Geoffrey and Larry Steinbrenner

- 2005 Chronological Implications for Greater Nicoya from the Santa Isabel Project, Nicaragua, *Ancient Mesoamerica*, 16(1), pp.131-146. Cambridge University Press.

Salgado, Silvia

- 1996 *Social Change in a Region of Granada, Pacific Nicaragua (1000B.C.-1522A.D.)*. PhD dissertation, State University of New York, Albany.

Salgado, Silvia and Jorge Zambrana

- 1994 El sector norte de Gran Nicoya: Nuevos datos en la provincia de Granada, Pacífico de Nicaragua. *Vínculos*, Vols.18-19: 121-138. Museo Nacional de Costa Rica, San José, Costa Rica.

Stauber, Daniel M.

- 1996 Excavaciones Arqueológicas e Investigaciones Preliminares en el Sitio Los Placeres (NMA-1). In *Abundante Cooperación Vecinal: La Segunda Temporada del Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua*, edited by F. Lange, pp.49-68, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Taube, Karl

- 1989 The Maize Tamale in Classic Maya Diet, Epigraphy, and Art. *American Antiquity*. 54(1), pp. 31-51.

Vázquez, Ricardo, Frederick Lange, John Hoopes, Oscar Fonseca, Rafael González, Ana Arias, Ronald Bishop, Nathalie Borgnino, Adolfo Constela, Francisco Comares, Edgar Espinoza, Laraine Fletcher, Juan Guerrero, Valerie Lauthelin, Dominique Rigat, Silvia Salgado and Ronaldo Salgado

- 1994 Hacia Futuras Investigaciones de Gran Nicoya. *Vínculos*, Vols.18-19: 245-277. Museo Nacional de Costa Rica, San José, Costa Rica.

Zambrana, Jorge

- 2012 Estudio arqueológico en el sitio Los Martínez, sector El Pantanal. Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Zambrana, Orvin

- 2013 Excavaciones arqueológicas Ciudad Sandino, Oro Verde – Zona 7. Archivo de la Alcaldía de Ciudad Sandino, Managua, Nicaragua.

原稿受領日 2019年8月18日

原稿採択決定日 2019年10月16日